

林亜美著（法律文化社、2025年）

求職者支援訓練のジェンダー分析 受講者のつながる場とエンパワーメント

土橋 幸奈*

本書は、著者の林亜美氏が、2011年に創設された求職者支援制度に着目し、職業訓練を受講した女性たちが、仕事や生活においてどのような変化を経験してきたのかを明らかにするものである。求職者支援訓練を受講した女性たちの語りに基づき、職業訓練が受講者の技能形成や主体性にどのような影響を与えているのかを検討している。分析枠組みにはナイル・カビール (Naila Kabeer 1999) の提唱する〈エンパワーメント〉概念を用いて、資源 (resources)、エージェンシー (agency)、達成 (achievements) というプロセスとして人々の選択肢が拡張されていく過程を捉える。そして、本書において著者は、カビールが論じる「力 (power)」の3分類である「power within」「power with」「power to」を分析で用いるために、「意識を変化させる力」、「連帯する力」と「つながる力」、「変化への動員の力」と定義し (林 2025:17, 60-69)、女性受講者の経験を分析している。

本書は3つの調査から構成される。第一に、日本の職業訓練制度に関する先行研究の整理である。第二に、求職者支援訓練の訓練科目を対象とし、訓練科目と性別職域分離の関係を分析する。第三に、2010年の基金訓練および2011年の求職者支援訓練を受講した女性6名へのライフヒストリー・インタビューである。これらを通して、制度の位置づけと訓練の労働市場における機能、そして訓練受講前後の受講者の変化が整理されている。

本書の背景には、日本の技能形成が企業内訓練を中心に行われ、特に女性は、非正規雇用のみならず正社員であっても企業内訓練の機会に恵まれにくいとされてきたことがある。著者は、企業内訓練の機会に恵まれない女性たちにとって、公的に提供される職業訓練が有効な就労支援となりうることを指摘する。

分析からは、職業訓練を通じて受講者が学習習慣や技能を習得し、資格試験の合格経験などを通して自信を持つようになるなどの意識の変化が示される。これは自己認識の変化としてのpower withinとして捉えられる。また、受講生同士の交流を通して社会や他者とつながる経験はpower withとして理解され、さらにより良い就業機会やキャリア形成を目指そうとする意欲はpower toの萌芽として捉えられている。職業訓練が女性受講者にとって、直ちにエンパワーメントの達成になると評価することはできないとしつつも、その「一歩」となりうると評価している。

このように本書は、就職率などの成果指標によって評価されてきた職業訓練を、受講者の仕事や生活における主体の変化という観点から捉え直そうとする点に大きな意義がある。しかしながら、本書の分析にはいくつか検討すべき論点も残されている。評者の視点から、第一に「貧困」の定義、第二にエンパワーメント概念の捉え方、第三に職業訓練と性別職域分離との関係について取り上げたい。

第一に、「貧困」概念の整理についてである。本書の対象者は、雇用保険受給資格を持たない求職者や無職者である「特定求職者」であり、最貧困層ではないものの経済的困窮状態にある人々として位置づけられている。実際にインタビュー対象者は、母子世帯など、経済的自立を最優先課題として就業選択を行ってきた女性たちであるが、職業訓練を通して長期的視点を持ち、仕事の質を重視するようになった変化が示されている。

本書が描き出している「貧困」は、単なる世帯収入の低さとしての貧困というよりも、離婚による母子世帯化、非正規就業経験、学歴や年齢、ケア役割といった要因が重なり合うことで、女性の就業選択が制約されている状況として理解できる。

* 埼玉大学人文社会科学部研究科

このような状況は、カビールが論じるデイスエンパワメント、すなわち人々の「戦略的な人生における選択」(strategic life choice) が制約されている状態として捉えられる。

労働市場や家庭内の制約のもとで問題が個人化され、他者との連帯や交渉力を形成しにくい状態に置かれていることを意味しているとも考えられる。職業訓練という「場」を通して、受講者が同じ境遇の受講生と出会い、人的資源へのアクセスを得ていく過程を描き出している。しかし、その経験が個人化された状態をどの程度変化させるのかについては、必ずしも明示的ではないように思われる。その意味で、本書が用いる「貧困」という概念は、社会関係の中で個人化された状態に置かれ、選択の力を発揮しにくい状況を含むものとして整理する必要があるように思われる。

第二の論点として、エンパワメント概念の捉え方についてである。本書は、職業訓練を通じて受講者が学習習慣や資格取得への意欲を高め、より良い就業やキャリア形成を志向するようになる過程を丁寧に描いている。また、訓練後の就業経験においても、受講者が以前より主体的に問題へ対処しようとする姿勢や、交渉力の変化を捉えている点は重要である。こうした分析は、職業訓練が女性受講者に、エンパワメントをもたらしていることを示すものとして評価できる。その一方で、本書で描かれる意識や取り組みの変化は、個人としてのエンパワメントにとどまっているようにも見受けられる。受講者たちは技能形成を進めながらも、非正規就業にとどまることや、希望する労働条件を実現できないこと、さらには職場でのハラスメントといった問題にも直面している。加えて、家庭内の制約が訓練受講後にどのように変化したのかは描写が多くない。こうした状況を踏まえると、個人としてのエンパワメントが構造的問題への対応にどこまで結びつくのが重要な論点となる。

本書の最終章が指摘するように、求職者支援訓練において、集团的エンパワメントの発揮は容易ではない。だが、受講者たちが共有する就業上

の困難に着目するならば、それらを制度的課題として捉え直し、連帯の可能性を検討する視点も必要であろう。その意味で、本書が明らかにした個人としてのエンパワメントの到達点を踏まえつつ、構造的制約のもとに置かれた受講者たちが、どのように連帯を形成し、その制約を揺るがしうるのかについて、今後の研究の深化が期待される。

第三の論点は、本書の分析と性別職域分離との関係性である。本書では訓練科目を通じた性別職域分離の再生産を指摘している。そうであるならば、求職者支援訓練として実際に提供される訓練内容そのものが、受講者の就業選択やその後の就業経験にどのような影響を与えているのかについても、より踏み込んだ検討が重要だと考える。訓練内容が労働市場における構造的制約に対する認識や、交渉力の形成にどのように関わるのかという点は、派遣労働者のスキル形成を研究する評者にとって関心のあるテーマである。

最後に、本書の意義について述べたい。評者は派遣労働者の研究を進める中で、登録型派遣として働く多くの女性たちが、より安定的でやりがいのある労働に従事するためスキル形成への意欲を持ち、主体的に就業準備を行っていることを確認してきた。しかし実際には、そうした主体性の発揮は、企業の雇用管理のもとで制約され十分に評価されない場合も少なくない。その意味で、職業訓練が女性労働者の主体性や就業選択にどのような影響を与えるのかについて、女性労働者の視点から捉えようとする本書の試みに、多くの意義を見出すことができる。本書は、女性の職業訓練経験をエンパワメントの視点から捉え直すことで、ジェンダー化された技能形成や能力発揮の課題に重要な示唆を与えている。

参考文献

- Naila Kabeer (1999) "Resources, Agency, Achievements: Reflections on the Measurement of Women's Empowerment." In *Development and Change*, (30): 435-464.